

日本山岳写真協会 選抜展「それぞれの山」

日 時／平成24年2月 9日(木)～15日(水) 会 場／ポートレートギャラリー

日 時／平成24年3月13日(火)～18日(日) 会 場／京都市美術館

1	色づく高原	池 田 栄 子
昨夜来の雨も上がり、木道にはうっすらと霜化粧。滑る！と思ったその瞬間、私の足は宙を舞っていた。高原は驚く早さで狐の化身のように変化していた。そろそろと、及び腰で着いた頂上に秋景色が迎えてくれた。		
2	羊草日和	小 川 修
ここは夏の尾瀬ヶ原・上田代の池塘群。昼下がり、ハイカーがふと足を止めて、「朝はこの花咲いていたかしら」と疑う。水面のあちこちに白い清楚な花が散り数く。花の名は未草。未の刻、今の午後2時に咲くところからつけられたという。といっても、そんな正確ではなく午前11時ごろに咲き出し、夕方にはしぼんでしまう。鉄形の深緑の浮葉の中に一際明るく池塘を飾っている。		
3	春からの尾瀬	石 塚 茂
群馬、福島、新潟県にまたがる尾瀬国立公園。5月には、ミズバショウやリュウキンカが咲き始め、さまざまな草花が秋まで湿原を彩る。9月下旬には草紅葉が始まり、長い冬へ向かう。		
4	秋雨続く谷	岡 孝 雄
秋の鮮やかな色彩に輝いた谷川岳も、足早に長雨の季節がやってくる。低く垂れ込めた雲は谷を一層暗くし、雪は明日にでもやってくる。扇状に広がる谷は冷雨を集め、流れは勢いを増し存在感を示す。多量の雪に埋め尽くされる前のこの時、谷全体が最後の主張をする。		
5	厳寒の陽	鈴 木 進
雪原の大地、凍て雲から差す陽光に厳しさと安らぎを感じる。厳寒の中、張り詰めた空気の緊張感がたまらなく好きだ。霧氷の繊細さ、光彩を放つ太陽。自然が創り出す見事なアートである。		
6	滝谷展望	瀬 戸 口 隆 司
私が初めてこの大キレットを通過したのが今から30数年前である。この迫力とスリル感は今も変わらない。切り立つ急峻な岩稜と滝谷が造りあげる景観は、正に岩の墓場を思わせる。しかし、ひとたび岩峰に霧がまとわりつき光が射すと、岩峰群に命が宿り墓場とは程遠いポジティブな感情を生じることとなる。やがて、私の中には、心浮き立つ躍動感とし自然に対する畏敬の念が湧き起こってくる。		
7	雪の造形	辰 見 昭 子
下界は初夏。山はミクリガ池の割れる音で春を聞く。湖面の氷は、太陽の光で美しく輝き、雨や風で雪も形を変え、面白い造形を造る。帆を張った雪の舟に乗って、剱沢の雪渓上を真砂沢に下る途中、大きな口を開けたクレバス、水しぶきを浴びながら覗く。クレバスの下はどんな色をしているのだろう！		
8	モンスター集う山	名 取 洋
モンスターと呼ばれるアオモリトドマツの樹氷。冬ともなれば、八甲田山は蔵王と並び、モンスターの集う山として一躍マスコミに紹介される。とは言え、八甲田の冬は厳しい。明治期には雪中行軍の軍隊が遭難したことで有名となった。何度か足を運んだ結果、半日だけの太陽光線であったが、モンスターの集う姿をカメラに収めることができた。		
9	裏劔の秋	長 谷 川 洋 一
強い雨の中を室堂より真砂沢山荘に。昨日とは一変して晴天に恵まれ、仙人池ヒュッテに向かう。早朝より風もなく、池の周辺の紅葉を2日間ほど十分に撮影できた。そこで、池の平方面へ足を伸ばし撮影。帰路は小屋のスーパーおばあちゃんに元気をもらって……立山へ。		
10	晩秋	畑 島 淳
紅葉シーズンが終わり、双六小屋が小屋閉めの準備にかかる頃、毎年写真山行に出かける。下山の時、弓折稜線から小池新道の朽ち果てた木々が、私に問いかける。「今シーズンもご苦労様。来年も来いよ」と。山の短い晩秋の佳しさに注視し、作品を組んでみた。		
11	高層湿原の秋	藤 田 邦 子
長い間、心にかかっていた山である。アプローチが不便で、撮影を目的に度々登れる山ではない。当日は運良くまずまずの好天で、登頂と撮影に恵まれた。山名のごとく、平らで広大な高層湿原は、山の景観変化が少なく被写体は限られるが、山頂から周囲の山々の展望が広がる。平ヶ岳象徴の玉子石が晴れた空に映えていた。		
12	森の目覚め	舟 橋 恵 子
奥上高地に群落する二輪草は、雪が解け樹木の芽吹きが始まる頃、一年の眠りから覚め、一斉に咲き始める。まるで小人達が命を歓喜しダンスを踊るようである。流れるように、溢れるほどに咲く二輪草の群落、来年もまた、可愛い小人達に会えるようにと祈っている。		
13	黒部の夏	前 羽 光 雄
奥飛騨、黒部源流への山路、山稜にはびっしりとハイマツの群生。その大自然の素晴らしさ、厳しさをまざまざと見せ付けられる。ハイマツは、中部山岳以北の高山に自生する。日当たりの良い、風当たりの強い砂礫地、尾根等に地を這うように育ち、10年経っても長さ1m、太さが1.5cm位にしか育たない。30年経って一人前と言われる。自然淘汰、やがて新しい命が芽生えてくる。		
14	雪面模様	松 原 貴 代 司
北アルプスの3000mの稜線では、10月初旬ともなると初冠雪を見て、積雪は厳冬期・春と続き夏を迎え徐々に消えてゆく。この間、雪面はそれぞれの季節に合わせ様子を変え季節ごとの容顔を見せてくれる。厳冬期には乾いた雪が烈風に吹き飛ばされシュカブラを形成し斜光に鋭角に煌く。長い冬を越えると雪面は柔らかく微笑み雪粒が春の日に輝く。そして夏、スプーンカットを形成し雪下の高山植物に山の詩を引継ぎ準備に入る。		